

部門別総評

日本画部門 審査委員長 川井 坦

第86回展の日本画部門の出品数は、昨年の記念展に比べて10点程多くなりました。特に今年は、ベテラン作家の出品がこれまで多くをしめてきた中で、初出品者が増え、若い人達の出品が目立ちました。この事は今後の日本画部門の新しい展開を予感できるものであり、期待も大きいものとなりました。審査でもこの点が強く反映され、初入選が8名で、その中で初出品初入選が5名となりました。また、受賞された2名の若い作家で新鮮な力が認められました。

入選作品は、常々考えなければならない表現の中味として、それぞれ作家自身の持つ「個性・もの」を幅広く多様な素材の中から選び出し、その中に強く自己を訴えようとする気持ちの表現が必要ですが、今回は、それが審査する側に伝えられた作品でありました。

次に日本画には、伝統的な表現・技法の問題があります。特に顔料（水干・岩絵の具など）のそれぞれの持つ特徴と美しく発色させ定着させる研究が必要となります。たとえば、北海道では特に冬期間の屋内の湿度が低いため、膠の濃度も若干薄めに考えなければ画面に亀裂が生じたりする経験すると思います。これは基底材（和紙・布など）との関係が深い問題です

入選作品の多くは、この問題がクリアーされていますが、もう一度しっかり見直す必要があります。十分に研究して欲しいものです。同時に表現の基となるものは「写生」が第一と考えるので、観察と写生の力を十分に持つように期待しているところです。

受賞になった2点は、どちらも若い伸びやかな力を感じさせ、今後もっと見たい期待を持つ作品であり、受賞となりました。

ベテラン作家にも研究の跡が見られますし、安定感には十分に評価されることです。出品された方々に今後とも期待するところです。

油彩部門 審査委員長 堀内掬夫

今年は85周年記念展の翌年、又長引く東日本大震災の影響もあつてか、昨年より搬入数を減らした。しかし、5年を迎えた道展「U21」の繋がる効果もあり、10代、20代の若い層の出品が減らずに例年通りの数を示したことは希望であった。これに較べて近年男子の出品が伸びないのは気がかりの一つである。目についた傾向としては、年齢を越えて1点作家が増え、制限150号の大作に挑む若い作家の大型化であった。2年前よりの審査日を1日短縮し、その分会期を増やす方針を確認して、2次・3次の審査では作品について様々な意見交換をして、集中力のある丁寧な審査を行い、142点の入選作品を決めた。

惜しくも落選した方は、自分の作品の不足な点をよく検証し、さらに向上した作品での挑戦を期待したい。テーマや技法は年々多彩になり、若い作家の斬新さ、ベテランの堅実なレベルアップがみられる。

地方の公募展の中で、道展が86年も歴史を重ね、しかも高いレベルを維持していることは誇れる事実である。本会が求める個性豊かな、高い構成力、技術力、創造力ある作品群が、会の活性化、さらなる発展のエネルギーである。

水彩部門 審査委員長 宮川 美樹

搬入数は昨年を上回って100点。それに伴い入選も昨年よりも2点増の27点とした。

全作品を通観し、水彩の特質とされている軽妙味に流されずに、しっかりと対象に取組んだ力作も多く、まず安堵。

審査は多数決を基本に、適宜、意見を交わしながら進行し、初入選3名を加えて入選者27名を決定した。

授賞審査は吟味しながら候補作品を数点選出し、絵画の基本にかかわる意見交換もなされながら慎重に進められた。佳作賞2点、新人賞1点、更に、新会友推挙1人を決定した。いずれの作品も優れた描写力に支えられ、緊張感ある構成を表出した力作である。

水彩らしさだけを追求するのもよい。だが表現材料のひとつと捉えて、その可能性に挑戦してほしい。表現意図の明確さ、緊密に響き合う色彩と構成など絵画の基本となる要素を自分なりに展開する姿勢を絵画制作の基盤に据えてほしい。

他者の眼や表現技法を借りて、それをなぞるだけの作品では、人を惹きつける魅力に欠ける。己のねらいを自分なりの方法で表現するところが絵画の立ち位置だと考える。

透明水彩による表現、不透明によるもの、アクリルによるものなど多様な素材で制作され、表現技法も細密描写、渴筆描法など様々な展開が見られて、展示壁面は豊かで見応えあるものとなる。

限られた壁面故、厳しい審査とならざるを得ない事情となっている事に心苦しさを感しながらも、更に、水彩描法の多様性を生かした内容ある水彩画が多く生まれてくることを期待している。

今年ほど制作の意味を考えた年はなかったように思います。鎮魂の春を抱えた年でしたが時が過ぎ秋になり、道展の版画部門でもいつもの審査風景を見ることができました。入選点数は厳正な審査の結果、17点となりました。減少傾向が見られ憂慮すべき事態であります。内容的にはむしろ良かったように思います。この中には受賞者が2名、会友推挙が1名、含まれております。このことは喜ばしいことではありますが公募展はあくまでも相対的な評価であり、他の評価に対して絶対的なものではありません。従って、結果を見て一喜一憂することなく自己の個性や世界観を見つめて研鑽努力する姿勢が必要であると思われまます。特に版画の技術は日進月歩であり、向上心が触発される機会を模索して自己の表現に有効な技術は貪欲に吸収して欲しいものです。

また、若い人や向上心のある人が育つ組織は健康であると思えます。その意味からすると版画部門は20～30歳代が過半数を占め、フレッシュな展示空間が特徴と言えましょう。版種としてはシルクスクリーンが圧倒的に多く、競い合っているのが目立ち、新人賞の中村理沙がその中でも地道な描画と色調に個性が光ります。併用版を駆使した佳作賞の戸山麻子は上品な色調と大胆な構図が魅力的であり、努力を重ねた会友推挙の奥秋広美はトーンが美しい木版画となりました。今年は3つの版種が響き合う空間となりそうです。最後に、版画部門で育った作家が国内でも、国際的にも活躍されることを期待しております。

入選数は、昨年とさほど変わらなかったが、全体的に具象、抽象とも制作にじっくりと時間をかけた佳作が多く見られた。首、胸像の小品に彫刻としての充実したフォルムと構築力があり存在感を示していた。次の発表に半身あるいは全身像に取り組んだら…と大きな期待を持たせる。

次に、過去幾度も入選を続けていたり、受賞もして、もうひといきで次のレベルへと飛躍する目前で不出品となり、本当に残念に思ったり動向を気にすることが何年も続いたが、今回再出品となった人達が5、6名いたことは喜ばしい。懐かしく、ほっとしたと同時に、長いブランクがあったにも拘わらず、感性は以前より研ぎ澄まされていたのには感心させられた。その中の一点に、部門を超えて多くの会員の注目を集めた作品があり、彫刻部の一員として嬉しく感じた。

最後にいつもいっていることだが、ちまちまと細部にとらわれ、なんとなく無難な制作をするのではなく、部分的な破綻やまちがいを気にせず、目標とするものに近づける制作態度をより強く求める。誰にでも、あこがれる作品のかたちがあるものだ。求め続けて努力するときには必ず、見る人の心に響く作品ができると思う。



協会賞 菱野 史彦

今年の工芸部の搬入数は、51点と昨年度に続き9点の減少となった。一般的に言われる少子高齢化に加え、経済的・社会的環境の衰退期に入った今、造形活動を目指す若者にとって、大変厳しい状況下にあることは否めない。

また一方では公募展に対する若者の変化も見逃せない。道展のみならず、中央（東京）の名だたる公募展が軒並み出品数の減少に悩まされているのは周知のことである。公募展は、美術の啓蒙と先覚的役割を担ってきたのは確かではあるが、今やその目的や意義を問い直す必要性に迫られているのではなかろうか。

さて、今年の搬入作品全体については、数こそ減ではあったが水準以上の秀作が多く、会員一同心を込めて審査に望むことができた。特に入選数回の出品者や常連と言われる出品者に斬新な造形とマンネリを打破しようとする努力が随所に見られたことはまことに喜ばしいことである。

陶芸は、受賞した上田文子の作品はもとより技術的な向上と新しい試みがなされ、染織はより繊細さと大胆な造形が心地良い。木工の渡辺瑞生の作品は、昨年とは技術的にも造形的にも数段の進歩が見られ、そのほほえましい姿は好感をよぶ。圧倒的な迫力の町嶋真寿の作品や現代文明の行く末を暗示するような吉成翔子の作品など、今後の工芸に希望を持たせるような作品が多く、展示が楽しみである。

継続は力なりというように、不断の努力と未知への挑戦を心がけてほしい。